

短期連載「立正安国と民衆の幸福——池田先生の指導に学ぶ」では、小説『新・人間革命』をはじめ、先生の著作、スピーチから、「立正安国」の本義と、学会の社会建設の活動の意義について確認する。

へ1971年6月、牧口初代会長の胸像が聖教新聞社（当時）で除幕。山本伸一は先師の立正安国の大闘争をしのぶ。日蓮仏法は「立正安国の宗教」である。

「立正安国」とは、「正を立て国を安んずる」との意義である。

正法を流布し、一人ひとりの胸中に仏法の哲理を打ち立てよ。そして、社会の平和と繁栄を築き上げよ——それが、大聖人の御生涯を通しての叫びであられた。

一次元からいえば、「立正」という正法の流布が、仏法者の宗教的使命であるのに対して、「安国」は、仏法者の社会的使命であるといつてよい。

大聖人は「一身の安堵を禱（いのち）ばまず四表の静謐（せいひつ）を禱（いのち）らん者か」（全31・新44）と仰せになつてゐる。「四表の静謐」とは社会の平和である。

池田先生の指導に学ぶ

立正安国と民衆の幸福

1

現実に社会を変革し、人びとに平和と繁栄をもたらす「安国」の実現があつてこそ、仏法者の使命は完結するのである。（小説『新・人間革命』第15巻「開花」の章）

伸一は78年1月、香川の四国研修道場を訪問。夜の瀬戸内海を見つめ、源平の「屋島の戦い」を思い描く。

「大聖人は、民の世をめざされたことは明らかだが、単に制度的な次元での民の世ではない。万民が平和と繁栄を享受し、幸せに暮らすことができる世であつた……」

社会の制度や仕組みは大切である。しかし、より重要なのは、それらを運用していく人間の心である。いかに制度が整つていても、人間のいかんによつて、制度は悪用、形骸化（かたがた）されてしまう危険をはらんでいるからだ。

大事なことは、為政者も民衆も、人間は等しく尊厳無比なる生命をもっているという、生き方の哲学を確立できるか否かである。また、人びとの苦しみ、同苦し、他者の苦を取り除こうとする慈悲を、生き方の柱に

「安国」は宗教の社会的使命

「立正」といえる。そして、そうした生き方、考え方のもとに、社会の進むべき方向性を見いだし、政治のみならず、経済、文化、教育など、あらゆる分野で、人びとの幸福と繁栄と平和を築き上げていくことが「安国」となるのだ。

「立正」なくしては、真実の「安国」はない。また、「安国」なき「立正」は、宗教の無



力を裏づけるものとなるう」（小説『新・人間革命』第26巻「勇将」の章）

なぜ、現実社会の真つ直中で、労を惜しまず「広宣流布」「立正安国」の挑戦を続けるのか。

その意義を、恩師は故郷の北海道の同志に語ってくださったことがある。

第一に、地域と社会への貢献を果たしながら、多くの人びとと仏縁を結んで、自他共に功德を広げていくことができる。

第二に、戦いを通して組織の隅々まで力を漲らせ、異体同心のスクラムを強くすることができる。

第三に、目標に向かい、一人ひとりが「自分らしく

悔いなく戦い切った」と御本尊に報告できる清々しい歴史を残し、勝利の喜びをつかめる。

使命の激戦を一つ一つ、勝ち越えながら、わが同志が「功德」と「和楽」と「歓喜」の実証を、いやまして仲良く賢く、朗らかに開いていくことが、先生の願いであられたのだ。（2012年12月の「随筆 我らの勝利の大道」）

戸田先生は、第2代会長就任3年後の1954年に政治・経済・教育など、社会の各分野に有為な人材を送る「文化部」を新設。翌55年の統一地方選挙に学会として初めて候補者を擁立し、支援の活動を進めた。当時、国民の「政治不信」は募るばかりであった。（中略）民衆不在の日本政治の悲惨な現実があった。

戸田先生は激怒された。

「政治家は何をしているのか！ 庶民がかいそうではないか！」（中略）

日蓮大聖人は、幕府権力者・平左衛門尉に、「あなたは『万民の手足』ではないか。この国が滅びんとするのを、どうして嘆かずにいられようか」（全171・新856、通解）と厳しく諫められた。

民衆が根本である。民衆が主人である。民衆の幸福が目的である。そのために民衆が立ち上がり、民衆の手に政治を取り戻すのだ！

ここに、日本の政界にも人材を送り出す、最大の焦点があったのである。（2005年4月の「随筆 人間世紀の光」）

◇
1956年7月の参議院選挙にも、学会は候補者を推薦し、支

立正安国と民衆の幸福

2

援に挑戦。「大阪の戦い」を勝利に導いた山本伸一に、戸田第2代会長は、今後の社会建設の活動を展望し語る。

「広宣流布が進んでいけば、社会のあらゆる分野に人材が育っていく。政治の分野にも、経済の分野にも、学術・芸術・教育など、どんな分野にも、社会の繁栄、人類の平和のために、献身的に活躍している学会員がいるようになるだろう。つまり、あそこにも学会員がいる、ここにも学会員がいる、というような状況になっていく——広宣流布していく時代を具体的に表現すれば、こういう様相になるんじゃないか。

要するに、創価学会は、人類の平和と文化を担う、中核的な存在としての使命を課せられることになる、私は考えている。

伸ちゃん、創価学会は、そのための人材を育て上げていく、壮大な教育的母体ということになっていくんじゃないか。

要は、『人間』をつくることだ。伸ちゃん、この人間革命の運動は、世界的に広がっていくことになるんだよ」（中略）

「創価学会は、間違いない宗教界の王者になるにちがいない。大聖人が、『此の経文は一

学会は社会に人材を送る母体

切経に勝れたり地走る者の王たり師子王のごとし・空飛ぶ者の王たり鷲のごとし」（全1310・新1737）と仰せになっているように、大聖人の仏法は、思想・哲学の王者だ。その



◇
〈学会が政界に初めて人材を送り出してから6年後の61年11月、公明政治連盟（公明党の前身）が結成。同年の春、無所属として活動する議員らに、伸一は自身の考えを伝える〉

「新たに政治団体をつくるということについては、私も賛成です。

皆さんは、政治家として活動していくなかで、政治団体や党派の必要性を感じてきたのでしようが、私は広宣流布の未来を展望し、そうするべきではないかと考えました。

学会の目的は、民衆の幸福の実現です。そして、そのためには、世界の平和を築き、社会を

繁栄させていかなくてはならない。（中略）

偉大な仏法を、創価学会は、世界に弘めようと立ち上がったんだからな。

だからこそ、社会のあらゆる分野に、御本尊を持った真に優れた人材を送り出していくのが、創価学会の使命なんだよ。

それらの一人ひとりの、偉大な人間革命の実践が、新しい世紀における人類社会に、偉大な貢献をすることになる」（小説『人間革命』第10巻「展望」の章）

この学会という母体から育った人材が各分野で、必要であれば、それぞれ団体や機関をつくり、社会に貢献していくべきであるというのが、私の考えです。それは、何も政治の分野だけでなく、音楽・芸術や学術の分野でも、また、教育や平和研究の分野でも同じです。

今回、政治団体を結成するということは、その突破口を開くことになる」（小説『新・人間革命』第5巻「獅子」の章）

池田先生の指導に学ぶ

〈公明政治連盟の結成に向けて打ち合わせで山本伸一は、当時の政党、政治家が、企業や業界、組合などの利益代表のようになっていること、また支援する方も利権などの見返りを期待し、要求してくる実態があることを踏まえて語る〉

「これでは、本当に国民のための政治はできない。」

それに対して、学会は、同志である皆さんを政界に送り出すために、全力で応援してきたが、見返りなどを求めたことは、ただの一度もない。まさに、公明選挙、公明政治の基盤をつくってきました。それは、これからも変わりません」

政治の善し悪しは、ただ政治家だけによって決まるものではない。政治家を支援し、投票する人びとの意識、要望が、政治家を動かす、政治を決定づける大きな要因となっていくものである。ゆえに、政治の本当の改革は、民衆の良識と意識の向上を抜きにしてはあり得ない。学会は、その民衆を目覚めさせ、聡明にし、社会の行く手を見せる眼を開かせてきた。(中略)

「どこまでも全民衆の幸福を第一義に、(中略)民衆に仕えるという気持ちで、地域住民の手足となってください」(小説『新・人間革命』第5巻

「獅子」の章)

〈1962年1月、公明政治

池田先生の
指導に学ぶ

立正安国と民衆の幸福

3

連盟の発足が発表される

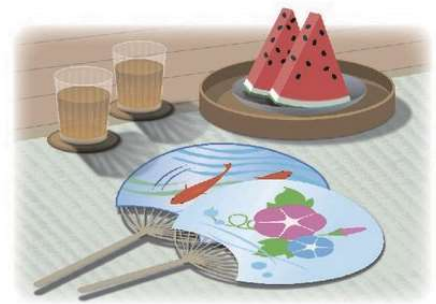
山本伸一が「公明政治連盟」という政治団体結成に踏み切った最大の理由は、創価学会は、どこまでも宗教団体であり、その宗教団体が、直接、政治そのものに関与することは、将来的に見て、避けた方がよいという判断からであった。いわば、学会として自主的に、組織のうえで宗教と政治の分離を図っていたこととしていたのである。(中略)

宗教も、政治も、民衆の幸福の実現という根本目的は同じである。しかし、宗教が大地であるならば、政治はその土壌の上に繁茂する樹木の関係にあり、両者は次元も異なるし、そのための取り組み方も異なる。

たとえば、核兵器

の問題一つとて、核兵器は、人類の生存の権利を脅かすものであり、絶対に廃絶しなければならないという思想を、一人ひとりの心に培っていくことが、宗教としての学会の立場である。それに対して、政治の立場は、さまざまな利害が絡み合う国際政治のなかで、核兵器の廃絶に向かい、具体的に削減交渉などを重ね、協調、合意できる点を見いだすことから始まる。

また、宗教は教えの絶対性から出発するが、政治の世界は相対的なものだ。そうした意味から、やはり、



清潔と大衆福祉の原点

宗教団体のなかでの政治活動と宗教活動との、組織的な立て分けが必要であると伸一は結論したのだ。そして、政治活動は、政治団体が主体的に行い、学会

は、その支援をするという方向性を考えてきたのである。(小説『新・人間革命』第5巻「獅子」の章)

〈公明政治連盟はその後、「大衆とともに」との指針のもと躍進し、参議院と地方議会での「第三勢力」になる。そして64年5月、伸一は公明党の結成を正式に提案する〉

日本の政治家には、何よりも、まず指導理念が欠落していた。たとえば、世界の平和を口にしても、イデオロギーや民族の違いをどう乗り越えるかとい

う哲学をもつ、政治家はいなかった。それゆえに、仏法の大哲理に基づく、「地球民族主義」という理念を掲げた政党の必要性を、伸一は、痛切に感じていたのである。

「地球民族主義」は、かつて、戸田城聖が提唱したものである。——人類は、運命共同体であり、民族や国家、あるいはイデオロギーなどの違いを超えて、地球民族として結ばれるべきであるとする考え方である。

公政連の「国連中心主義」の主張も、「地球民族主義」から導き出されたものであった。(中略)

イデオロギーや他国の意向に、左右されるのではなく、民衆の幸福と平和の実現を第一義とし、中道の立場から政治をリードしていく政党を、人びとは待ち望んでいるはずである。

さらに、日本の政治改革のためには、腐敗と敢然と戦う、清潔な党が出現しなければならぬ。政界浄化は、公政連の出発点からの旗印であり、これまでの腐敗追及の輝かしい実績は、比類がない。(中略)

大衆の味方となり、仏法の慈悲の精神を政治に反映させゆく政党が、今こそ躍り出るべきであらう。それが衆望ではないか——山本伸一は、こう結論したのである。(小説『新・人間革命』第9巻「衆望」の章)

「日本は戦時中、国家神道による思想統制を強め、軍部政府は戦争を遂行するため、その考えにそぐわぬ宗教を弾圧した。まさに国家と宗教が一体となった『政教一致』であった」

そのなかで創価教育学会への大弾圧も起こったのである。

(中略)

牧口(初代会長)も戸田(第2代会長)も、「宗教の自由」を守るために戦い抜いた。「屈服」は人間の「魂の死」を意味するからだ。そして、牧口は獄死したのである。

こうした歴史を繰り返さないために、現在の憲法で定められたのが、政教分離の原則であった。日本国憲法の第二十条には、「宗教の自由は、何人に対してもこれを保障する」とある。

そして、それに続いて、「いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない」と謳われている。この条文は、「宗教の自由」を確保するために、国や国家の機関が、その権力を行使して宗教に介入したり、関与することがないように、国家と宗教の分離を制度として保障したものである。そのため、特定の宗教団体、国家や地方公共団体から、立法権や課税権、裁判権などの統治的な権力が授けられることを禁止し

池田先生の
指導に学ぶ

立正安国と民衆の幸福

4

たものにほかならない。

一方、宗教団体が選挙の折に候補者を推薦したり、選挙の支援活動を行うことは、結社や表現、政治活動の自由として、憲法で保障されている。また、そうして推された議員が、閣僚などの政府の公職に就くことも、それ自体は、決して政教分離の原則に反するものではないことは明白である。(小説『新・人間革命』第3巻「月氏」の章)

◇

「宗教団体の政治活動については、国会の場でも、『憲法の番人』と呼ばれる歴代の内閣法制局長官が、憲法に保障されていることを明言している。山本伸一は創価学会と公明党の関係について、正しい認識を促すために、『政治と宗教』の筆を執り、結党の日(1964年11月17日)に上梓した。その「はしがき」で、こう訴えた」

「よく『宗教

団体の政治への

憲法で保障された政治活動

介入」とか『宗教の絶対性を、妥協の世界である政治の場に持ち込む』等の批判があるが、これがいかに的外れのものであるかは論をまたない。

宗教は宗教の広場で、政治に拘束されることなく、あくまで、その高低浅深の討究をなすべきであり、宗教の自由は永久に存続させなければならないこ



とは当然のことである。

そして、政治は、より最大公約数の幸福実現のために妥協せざるを得ないのも当然のことである。しかし、政治がいかに妥協の世界であるからといって、根底に理念のない政治は、なれあいのみの妥協となり、所詮、党利党略におちいり、民主政治を犠牲にする場合が実に多い。政治は大地に育つ千草万木の

ごとく変化の世界であり、相対的な世界である。宗教は大地のごとく政治・経済・教育等のあらゆる文化の本源であり、永久不変の哲理である。偉大なる宗教、偉大なる哲学のない政治は根無し草であり、権力の争奪、民衆の不幸をくり返すのみである」(小説『新・人間革命』第9巻「衆望」の章)

◇

「公明党は11月に結党60年を迎える。現在、政権与党の一翼を担う公明党が中道主義を掲げ、日本の政治の安定に寄与してきたことは、多くの識者が指摘する。また国民目線で改革のリーダーシップを発揮し、福祉や教育などが国の中心施策に据えられた。池田先生は、2001年に産経新聞のインタビューに応じ、次のように語った」

「船には時化などに遭遇しても復元力が働く重し——バラストが備えられている。公明党には、このバラストのような存在になってほしい。常に庶民・大衆と目線を同じにしながら、そこをベースに社会の健全なあり方を模索していく復元力的存在であってほしい。それが中道だ。中道とは道に中するということだ」「結党時の政治状況は、財界・大企業をバックとする保守勢力と、巨大労組に支えられた革新勢力が激しく対峙し、不毛の対決が続いていた。その谷間で日の当たらない庶民・大衆がたくさんいた。その人たちの声を代弁し、地方や国政の場に反映させ、自分たちでもやればできるのだという希望と自信を与えたこと。これが公明党草創以来の勲(いさし)ことを成し遂げた名譽」だ」

「創価学会は『生命尊厳』『人権』『恒久平和』という普遍的な理念を、現実社会の中で実現するために、政治支援の活動も行い、庶民を基盤とした新たな潮流をつくりあげてきた。池田先生は、自らが指揮を執った最初の統一地方選挙（1955年4月）を振り返りつつ、記した」

政治を『自分には無関係』と傍観するのは、結局、自分の運命を他人任せにしてしまうのと同じである。ゆえに、戸田先生は叫ばれた。

「青年は心して政治を監視せよ」と。それは、今日の民主主義社会に生きる市民として、当然の行動であろう。

民衆詩人ホイットマンは「民主主義の真髄には、結局のところ宗教的要素がある」（『佐渡合重信』『民主主義の真髄』講談社）と喝破した。一個の人間の尊厳性を信じる「宗教性」に依拠してこそ、民主主義は画電点睛を得るのだ。（中略）

青年が突破口を開け！

青年が全責任を持て！

文化闘争の「初陣」への、先生の期待は大きかった。（『随筆 人間世紀の光』〈2005年4月〉）

◇

〈当時、日本の政界には金権選挙が横行していた。戸田先生は、学会の運動は「公明選挙であり、宴会政治のような腐敗した政界を正すのが使命であ

池田先生の指導に学ぶ

立正安国と民衆の幸福

5 二完

る」と語っていた。学会の支援活動は、政治を民衆一人一人の手に取り戻す戦いでもあった。本来、我々は、その汚れた政治を変えるために立ち上がったのだ！

「宗教心ナキ改革ハ皮相なり、勇氣ナキナリ、元氣ナキナリ」（『田中正造全集』岩波書店）とは、明治の思想家・田中正造の断言である。その燃え上がる信仰を、我らは持っているではないか！

私の心は熱く燃えた。

仏法は勝負だ。戦う以上は断じて勝つ！

妙法を胸に、全人類の宿命転換へ立ち上がった民衆が、いかに崇高で、いかに偉大な力をもっているか、日本中に示してみせる！

我らの武器は、どこまでも誠実な対話であり、勇気の対話である。

仏法者としての社会的使命に目覚めた、民衆の団結の力で勝つのだ！（中略）

それまでの日本になかった「新しい民衆運動」の、堂々たる第一歩であった。その挑戦が、傲慢なる既成勢力からの嫉妬と反感を呼び起こすのは、もはや必然のことであった。

今も方程式は同じである。

それは、「立正安国」への戦いは、民衆を侮蔑し、隷属させる「権力の魔性」との戦いであるからだ。断じて恐れるな！

社会での闘争が仏法の魂

断じて負けるな！
この戦いのなかから、民衆が勝利に輝く人間世紀が、晴れ晴れと始まるのだ！（『随筆 人間世紀の光』〈同〉）



間世紀の光」〈同〉）

〈学会が初めて推薦候補を立てた、翌年の参議院議員選挙（1956年7月）の折、ある婦人部員（当時）が、戸田先生に質問したことを通して池田先生はスピーチした〉

「先生、いくら『王仏冥合』（政治をはじめとする世法が、仏法の慈悲と知恵に基づいて行われ、社会に仏法の精神が開花していくこと）のためといっても、選挙の支援というのは、本当にくたびれてしまいます」（笑い）と。

戸田先生は、こう言われた。「それは、そう思うかもしれ

ない。だれしも苦勞は避けたいものだ。しかし、この世に何も残そうとせず、ただ自分だけで拝み、静かに死後の成仏を願いつつような信心は、大聖人の仏法ではない。所詮、『仏法は勝負』であり、本當の仏法は、社会での大闘争の中にある。仏法を現実社会の中で行い、人間のため、国のため、世界のために戦ってこそ、真の大聖人門下であり、真の革命児ではないか。それが創価学会だ」（中略）

「御書には『一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ』（全970・新1324）と仰せではないか。この穢土（汚れた人間社会）での今世の戦いによって、三世永遠の福德を積めるのだ。永遠の生命からみれば、一瞬の人生を、我々は広宣流布の大闘争で飾ろうではないか——と。」（中略）

同じ一生ならば、「よし、自分は立派に『歴史』をつくつてみせる。この一生で、立派に何かを創造し、残してみせる」と戦ったほうが偉大である。幸福である。

自分がどこまで行けるか、どこまで戦えるか、どこまで限界を伸ばせるか、やるだけやってみる。ともかく戦い抜いていく。その人の信心こそ、大闘争の連続であられた日蓮大聖人の御生命に感応しゆくと信ずる。大功德の人である。（第56回本部幹部会〈1992年7月〉）